

BOSAIラボ

BOSAI Lab. (Disaster Mitigation Lab.)



防災・減災のために、大学生としてできることを Do our best for “BOSAI” (disaster mitigation)

■学生：27名（明日海斗，松尾祐輝，大塚晴紀，粕谷昌貴，藤田光，堀 雅也，鄭宇軒，小岩井優子，鳥谷佳菜，秀島美咲，加藤瑞樹，柴山遼太郎，武次稀凜，得田実愛，河村優結，平野晴哉，柳澤美那，湯本莉衣，石川巧，乾大和，柴崎創芽，島田愛果，鈴木皓斗，瀧本早蘭，平岡茉瑠乃，福井智遥，脇田知怜）

■担当教員：小松怜史，細田暁，稲垣景子

■連携・協力：豊穰な社会のための防災研究拠点，福山市立鞆の浦学園

■活動地域：常盤台キャンパス周辺，福山市鞆の浦

■サイト：<https://bosai-lab.ynu.jp/>

BOSAIラボは「防災」をフィールドに、大学生としてできる防災・減災に資する活動を考え、実践していくプロジェクトです。今年度は4つの実践チームと2つの研究班に分かれて活動しています。

横国生チームは留学生の防災意識向上に向けて活動しています。春学期には大学の留学生係の方に協力していただいて留学生の防災意識のアンケート調査を行いました。来年度に向けてはまみらいPJの防災チームと協力して留学生向けの防災イベントを企画しています。

避難所チームは避難所を対象に理想的な空間づくりや制度について考えています。災害発災時には一時避難場所となる横国のキャンパスでできる工夫を考え、実際にやってみることで、有事でも快適に過ごす方法を模索しています。

防災行動チームは市民の防災行動に関する知識を深めるために活動しています。横国生に向けて「通学中に被災した時の行動」についてのアンケート調査を行いました。今後はその状況を想定してとるべき防災行動をロールプレイし、フィードバックしていきます。

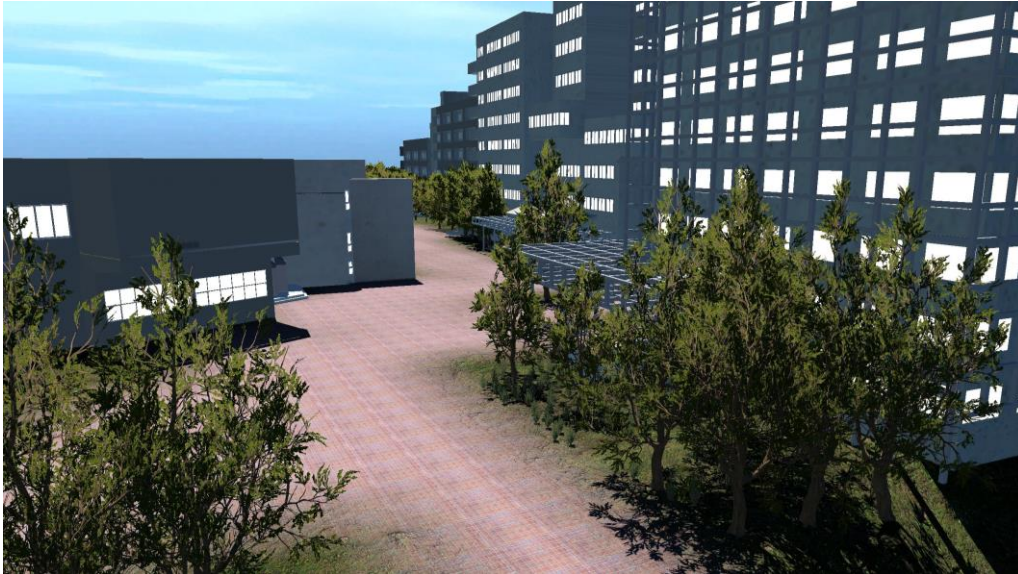
まち歩きチームはバリアフリーの避難誘導に焦点を当て、常盤台キャンパスの周辺で、避難経路の策定や危険な場所の確認をするフィールドワークを行っています。実際に車いすを使われている大学院生の方とのコラボフィールドワークも行いました。

旧地名班は消滅した地名と災害との関係を調べています。地名の研究を通じて地域の災害リスクを整理し、防災意識向上に貢献します。

防災教育班は福山市立鞆の浦学園を訪問し、細田先生の防災授業のお手伝いを行いました。今後も鞆の浦学園の連携を続けていきます。

来年度は、10月のぼうさいこくたい出展を目指し、引き続き防災のためにできることを模索・実践してきたいと思っています。

横国VRキャンパスプロジェクト YNU VR Campus Project



**誰もが自由に関われる大学を目指し、
キャンパスをVR化しています**
**Aiming to be a university
where everyone can freely interact,
we are transforming the campus into VR.**

- 学生：5名（梅澤希, 青砥陸, 安田周世, 田中大志, 上田直弥）
- 担当教員：為近恵美
- 活動地域：横浜国立大学
- サイト：<https://vrynu.com>

新型コロナウイルス感染症の5類指定以降、一度はオンライン中心となった社会は元に戻りつつあります。しかし、再び社会が感染症などの脅威にさらされることが無いとは言い切れません。また、オンラインには例えば場所や時間を選ばないという良さがあり、今後も残っていくと考えられます。しかし、オンライン会議などでは実際に会って話すようにはいかず体験の質には課題があります。本プロジェクトでは、VRを活用してオンラインと対面での体験の質の差を縮めることを目指しています。特に、研究や教育の場での活用を目指しています。また、現実のキャンパスで実現することが難しいことでもVR空間上なら自由な発想で実現できるという点や、遠い場所に住む方や障がいを持っている方など横浜国立大学を訪れることが難しい人でもキャンパスを体験できるという点もこのプロジェクトの強みです。

6月に開催された都市科学部オープンキャンパスでは参加者にVRゴーグルを装着してもらい、VRキャンパスを見学してもらいました。9月には東京ゲームショウを見学し、最新のVR関連技術への知見を広めプロジェクトの今後の展望を検討しました。本プロジェクトは国土交通省が主導する3D都市モデルオープンデータ化プロジェクト「PLATEAU」をベースにしており、PLATEAU AWARD 2023への応募を目標としたキャンパス内の建物のモデリングとブラッシュアップを行いました。

これまでは、建物のモデリングを通してクオリティを上げることに軸を置いていました。今後は、VRのキャンパスを活用して様々な企画を行っていきたくと考えています。学内の各機関や研究室などとの連携を模索していきたくと思います。

キャンパスの魅力を耕すプロジェクト Cultivating attractions of campus project



キャンパスの土から新たな活動を掘り起こす。
Digging up new activities from the soil of the campus.

- 学生：9名（青柳篤広、熊谷風音、寺澤慶、鈴木健弘、伊藤きい柚、小栗航太郎、川井慶、清水琴美、鈴木日夏莉）
- 担当教員：藤原徹平
- 連携・協力：Y-GSAインディペンデントスタジオ「耕すPJ」
- 活動地域：常盤台（横浜国立大学キャンパス内）

コロナ禍により屋内に人々の居場所が失われたことを背景に、屋外空間での居場所づくりに可能性を見出しました。居場所をつくること、つかうことを通じて地域との交流を深めることを目的としています。緑豊かな大学内の資源を活用し、そこを訪れる人々が自由に居場所を見つけられるような魅力的なキャンパスを目指します。

春学期にはY-GSAのプロジェクトに学部生が参加し、レンガ作りや施工方法を学び、秋学期では学部生だけで活動を展開しました。今年度はキャンパスの資源由来のプロダクトづくりを目指し、日干しレンガの技術を応用しながら、版築によって窯を制作しました。試作段階ではあるものの、窯の温度は800°Cまで上昇するなど、一定の結果を得られました。さらに、窯を設置した場所が新たなキャンパス内の活動の場所としてのポテンシャルを見せてくれました。今後、ここで学外の人を巻き込んだイベントをしていくことも考えています。プロダクト製作に限らず、昨年度までの活動のノウハウも生かしながら、キャンパス内資源を活かし、学生と地域の交流を促進し、学びを活かす取り組みを展開していきます。

今後の活動では、窯を使った陶器の制作を進め、得たデータを粘土や窯に反映させていきます。また、ワークショップや大学周辺の陶芸サークルと連携した企画を考えています。さらに、窯の周辺に日干しレンガを応用したベンチやテーブルを設置して、Y-GSAのキッチンと一体となった空間を構想しています。大学の土がコミュニティを育む土台となることに期待し、新たな活動を創出していきます。

ワダヨコ Wadayoko



和田町で、人と人との、今と未来との架け橋になる Become a bridge between people, now and in the future in Wada area

■学生：27名（佐藤めぐみ、ソジファン、渡由貴、粕谷昌貴、堀雅也、井澤葵美、伊藤幸哉、海野萌、大野倫、河崎蒼依、後藤陸、平美優、中原舶登、宮下莉奈、山下虎太郎、山崎優子、山本純也、有倉直哉、池田萌夏、乾大和、河口紗香、佐々木遼太、瀧本早蘭、福島瑞穂、星野良太、三村涼葉、八坂麟太郎）

■担当教員：野原卓、尹莊植

■連携・協力：和田西部町内会、和田町商店街、和田西部第一子供会、NPO法人居場所そら

■活動地域：和田町周辺（主に保土ヶ谷区和田）

■サイト：<http://wadayoko2010.com> Twitter:@wadayoko_tw
Instagram:@wadayoko_

2010年から続く、現在の地域課題実習の中で2番目に古い学生団体です。当初は町の拠点である旧町内会館を1年間かけてリノベーションするために成立しましたが、その場所を利用する中で様々な人との交流が増え、町の団体と協力してイベントを実施するようになりました。今では、和田町（保土ヶ谷区和田周辺）の魅力を見つけて周知しながら、学生と町の人たちが互いに支えあう地域をつくることを目的として活動しています。

町の公園や小学校で、子供たちに楽しみながら防災について学んでもらう防災フェアや、各出店者が自慢の品を持ち寄るべっぴんマーケット、季節のお祭りや行事など、様々なイベントの主催や共催をしました。今年度は、コロナ禍が明け開催の規模が拡大したことで併せてメンバー数が増加したことで、学生ならではの視点で新しい企画を提案したり、若い力で運営に大きく貢献したりすることができました。ワダヨコ、町内会、商店街、教授で行う定例会議「和田町タウンマネジメント協議会」にも毎月参加し、組織を横断した情報共有や協力の活性化のサポートに努めました。また、和田町で親しまれ続けるゆるキャラ「和田丸」のプロデューサーとして、修繕やグッズ作りにも取り組みました。

年間を通して行ったイベントには、コロナ禍を乗り越えて数年ぶりの開催となったものが多くありました。将来に繋げていく力のある学生団体として、これらを楽しみにしている人たちのために長きに渡って大切に受け継いでいこうと思います。そして、今年度新たに繋がることのできた方たちとの関わり方も積極的に模索しながら、和田町周辺でのフィールドをさらに増やし、より広く密接な交流をしていきたいと考えています。

キャンパスUDプロジェクト

Campus UD Project



「通れる」だけでなく「通りたくなる」
「立ち寄りたくなる」場所づくりを考える
Thinking about creating a place not only "passable"
but also "want to pass by"
and "want to stay for a while"

■学生：10名（梶井康平, 伊藤礼佳, 高井優紀, 早川葵, 伊藤麻衣, 橋隼杜, 大久保春香, 小杉実穂, 古田倫太郎, 森慧悟）

■担当教員：藤岡泰寛, 大原一興

■連携・協力：施設部, 障がい学生支援室

■活動地域：横浜国立大学キャンパス（Sガーデン周辺）

私たちは車いすユーザーも、そうでない人も大人も子供も皆で一緒に心地よく過ごすことのできる空間づくりに取り組んでいます。昨年度に引き続き、横浜国立大のローソン前のスロープ周辺環境改善に取り組み、「通れる場所」から「通りたくなる場所」へ、さらに「立ち寄りたくなる場所」となるデザインを考えました。

①立て看板の撤去（継続）…看板のせいでスロープ手すりを使いにくいという声があったので撤去された状態を引き続き維持されるようお願いしました。

②花壇の整備、植え付け…前年度植えた12種類の花のなかで「キャットテール」が今年も鮮やかな花をつけてくれました。横国の土や日照条件などに合っているようです。そこで、今年はキャットテールの植え付け範囲を拡大し、加えて、食べられる植物（春の七草）を植え付けてエディブルガーデンの可能性も検証しました。

③ガーランドの設置…今年もクリスマス前にガーランドと小規模なイルミネーションを設置しました。

④ふらりとプロジェクトとの連携強化…②③の取り組みを中心に、大学院生のグループと連携を強化し、スロープ周辺だけでなくローソン前の広場も含めて一帯が楽しく思わず立ち寄りたくなる環境となるよう工夫しました。

花壇の整備、植え付けによって周辺地域の方々から、「通りやすくなった。」「きれいになった。」などのお声をいただきました。プロジェクトを通じて、「通れる」だけでなく「通りたくなる」「立ち寄りたくなる」場所づくりがUDにとってとても重要であることがわかりました。今後もより楽しい場所づくりへの発展が期待されます。



里山コミュニティデザイン Satoyama Community Design



里山コミュニティデザイン

里地里山を拠点に、 人間と生物にとってより心地よい居場所の創造 Creation of more comfortable location of humans and other living creatures based on satochi-satoyama

■学生：21名（久保蒼生，中村心寧，山内葵，松本三千尋，松嶋瑞穂，大橋明日香，鈴木海帆，吉田涼香，長田拓之，武内那岐，西川聖哲，内野文敬，佐藤愛弥，戸澤玄，大島淳史，千葉美衣菜，松栄凜也，山口暖乃，高野素子，福田優茉，原田悠妃）

■担当教員：佐藤峰，倉田薫子

■連携・協力：花咲く里山（南足柄）

■活動地域：横浜国立大学，南足柄市

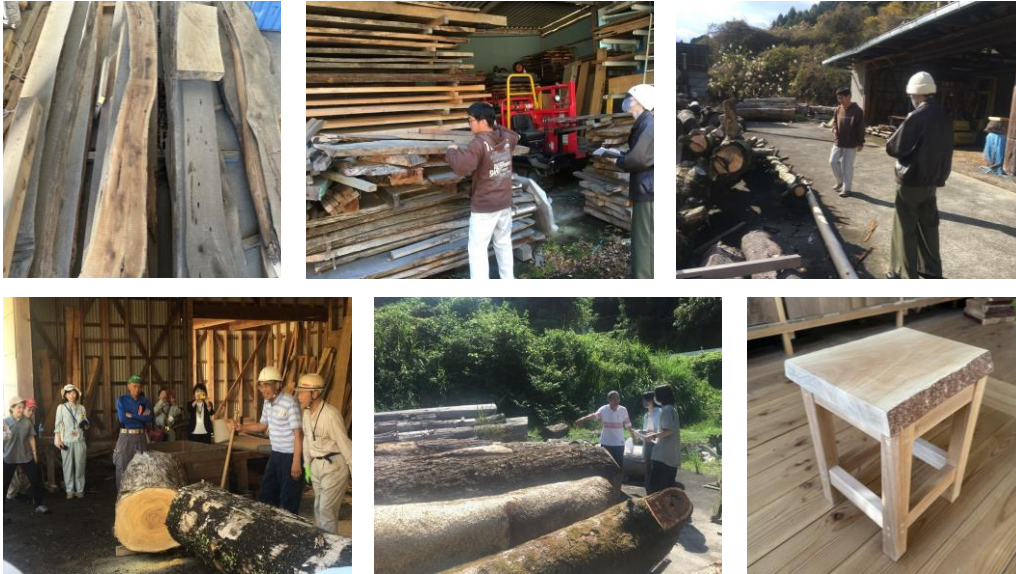
■サイト：<https://satoyama-esd.ynu.ac.jp/?p=465>

横浜国立大学と言えど？と質問されたら、多くの学生が緑や森といった自然に関する回答するでしょう。このように横浜国立大学の自然は学生にとってシンボリック的存在だと認識されています。しかしながら、学内の自然と人は互いに独立しながら、その営みを発展させているのではないのでしょうか。そこで、学内の自然という足元にある里地里山の資源を生かし、人と生物、自然にとってより心地よく、楽しい居場所にするために、様々な方針策定、思考をすることが本活動の目的としました。

まず、国大内の自然を細分化し、私たちが活動する拠点を「竹林」と決定しました。竹林整備をしながら、南足柄市にある「花咲く里山」の方々に協力していただき、学生が本場の里山整備を体験しました。横浜国大と花咲く里山での経験を往還させ、自然を整備することへの理解を深めました。その後、廃材を用いた流しそうめん大会の実施、常盤祭出店に伴う竹箸作りや楽器作り、小学生を招待して開催したESDワークショップの企画材料など、多方面への竹の有効活用を見出すことができました。

上記で、人と生物、自然にとってより心地よく楽しい居場所を創造することを目的としていましたが、今年度の活動では実現されることはありませんでした。理由は伐採した竹を放置しておくとう腐ってしまうため、廃材となった竹の有効活用を優先して、本プロジェクトの活動としたことがあげられます。そのため、今後の活動では自然の利活用だけでなく、人と自然が共存する空間創造にも力をいれていきたいです。現時点での案として、竹林に茶室を作ることが挙がっています。興味のある方はぜひ参加してください。

ローカルな素材のデザイン The Design for Local Materials



広葉樹を用いた家具・スツールの製作 Designing furniture and stools with broad-leaves trees

- 学生：9名（稲永拓真，鈴木拓弥，岩佐達樹，岩屋亜海，梅根悟嗣，追分美希，是村颯太，豊田亜美，花岡将真）
- 担当教員：志村真紀，原口健一
- 連携・協力：太田クリエイティブタウンセンター，関鉄工所，寺田倉庫，河端昌也教授，（株）木材工房あしがら
- 活動地域：横浜国立大学キャンパス内/羽沢地区/神奈川県
- サイト：Instagram：タグ「#ローカルなマテリアルpj」

広葉樹は樹種および各樹木により形が異なり、硬く加工が難しいため、現代社会において有効活用がなされにくいという現状があります。このプロジェクトでは、広葉樹を用いた制作活動を通して、里山の広葉樹を上手に活用する方法を研究しています。

今年度は昨年度から引き続き2024年10月完成予定の羽沢横国大駅前に建設中の羽沢リビオタワー内に設置される横浜国立大学羽沢サテライトキャンパスの什器製作を行いました。現在椅子6脚と大机のデザイン並びに製作を行っています。1年生は椅子を、3年生は大机を担当しています。具体的な活動としては、昨年度制作した椅子（写真右下）の仕上げを行った後、椅子の座面となる木材の鉋かけ加工を原口先生が管理する工房で行いました。大机は、サテライトキャンパスにおける配置からデザインし、その後天板の細かいデザインを進めてきました。そして、椅子並び大机の大まかなデザインが決定してからはどちらも脚部のデザインを決めるべく話し合いを進めました。また、安全に使用できるかどうかの構造計算の方法を構造専門の河端先生にご指導いただきました。11月にはリビオリタワーをデザインしている寺田倉庫さんと一緒にさせていただき、建設途中の設置予定地を訪れました。また、左の写真の一部は夏休みに参加した南足柄市の製材所における製材所ワークショップです。木材加工の現場を見学し、丸太を切った直後の木くずの香りを嗅ぐなど貴重な経験をさせていただきました。

1月のZOOM会議を通して、太田クリエイティブタウンセンターを通じて紹介してもらった関鉄工所さんに椅子並び大机の脚部の制作を依頼することとなりました。2月には関鉄工所さんと協力して脚部の最終的なディテールデザインを決定させ、羽沢リビオタワーの内装工事に間に合わせるため9月までに完成、搬入を目指していきます。



Yokohama Univer-City (YUC)



キャンパスデザインとコミュニティ創出によって 「大学をまちに開く」

Open our university to the city, by designing for campus and creating communities.

■学生：14名（井上彩子, 木崎拓実, 佐藤さくら, 柴田夕奈, 日比野莉良, 山下優輝, 佐武真之介, 富樫悠也, 中原船登, 日向野温, 廣田慎一朗, 中園拓也, 夏目朱理, 八坂麟太郎)

■担当教員：三浦倫平

■連携・協力：都市科学部, 常盤台地区連合町内会/常盤台地区社会福祉協議会, 共育会

■活動地域：横国大常盤台キャンパス周辺, 都市科学部棟104スタジオ, 横浜市常盤台コミュニティハウス

■サイト：<https://104scape.wixsite.com/yokohama-univer-city>
https://twitter.com/104ura_pj_YNU

YUCは、「大学をまちに開く」をテーマに始まった学生主導型プロジェクトです。都市圏の貴重な自然が保護された横国大のキャンパスでは、多様な人々による積極的な交流がなされています。YUCは、この魅力的なキャンパスを中心に新たなコミュニティの創出や空間デザインの提案・実践を行ってきました。大学から地域全体の価値を高めた先にあるものとして、“Univer-City”という言葉掲げています。

ほぼ全ての活動は、所属メンバーの自主的な企画・提案によって進められてきました。学内では、都市科学部と協力体制のもと、まちづくりで実用化されているプレイスメイキングの手法を用いた実証実験をもとに、都市科学部講義棟エントランス空間の機能改善を模索しています。また、本・黒板を介して見知らぬ人同士の繋がりを生む企画を実施し、大学の新しい利用方法の提示やコミュニティ空間の創出を行い、キャンパスの魅力向上を目指しています。

地域連携においては、大学への理解を深めてもらう機会として小学生向けのキャンパスツアーの開催、学生と地域の方々の交流促進及び地域施設の認知度向上と利用促進のためのワークショップの開催企画を行い、これまで地域の方々と築いたつながりをさらに深められました。さらに、地域課題実習と常盤台地域の情報を知ることができる情報誌「ときわだい掲示板」を他の地域課題実習と連携して作成、常盤祭にて配布し、多くの方に手に取っていただけただことで、地域課題実習と常盤台地域に関心を持っていただける機会を作り出しました。

今後は他の地域課題実習との連携強化など学生同士のつながりをよりいっそう深めることはもちろん、地域住民や大学運営との連携・協力関係をより一層強固なものにしていきます。そのうえで企画の対象者を拡大し、キャンパスだけでなく横浜中心市街地などにも活動範囲を広げ、様々な企画を実践していく予定です。

アグリッジプロジェクト Agridge project



「農」と「食」の力で地域活性化を目指す Aiming to revitalize local communities through the power of "agriculture" and "food"

- 学生：17名（清水翼, 松木杏志郎, 伊東秀真, 飯田朱音, 石井夏帆, 上床穂乃香, 藏重光希, 田中麻奈美, 村山美咲, 石川智清, 今井悠翔, 北浦竜之介, 工藤優太, 中舘美卯, Casey Frey, Yim Seryeong, Brandon Houston)
- 担当教員：池島祥文, 小林誉明
- 連携・協力：藤巻芳明, 常盤台コミュニティハウス, 常盤台地区連合町内会, 株式会社横浜ビール, 和田町商店街, 矢郷農園, 炭火焼肉大將軍, 社会福祉法人開く会, バニヤンツリーベーカリー, FM上星川, 特定非営利活動法人 居場所そら, ひまわり亭, アジアンキッチンわだ, 異食堂すみれ
- 活動地域：学外農地, 横浜市(保土ヶ谷区他), 小田原市上曾我地域
- サイト：<https://agridge-chiiki-kasseika.localinfo.jp/>

アグリッジプロジェクトは農業による地域活性化を理念に掲げ、商品開発・Agrink・Agreeting・和田べんの4部門で活動しています。

商品開発部門では社会福祉法人開く会と協力し、摘果される青みかんを使った焼き菓子を開発・販売しました。野菜を生産するAgrink部門では農業日報アプリを導入し、全員で野菜の管理を行いました。

4部門のなかでも今年度は、「人と人、人と知識をつなぐ」が理念のAgreeting部門に注力しました。活動内容は食・農に関連したイベントの企画・実施です。

イベントでは種から育てたポップコーンの販売と、野菜はんこのワークショップを行いました。はんこの材料は梱包時に捨てられる葉っぱや茎などです。思い思いのうちわや絵ハガキ作りによって、子どもたちが野菜に親しむ機会を提供しました。

自主企画では、自分たちの野菜の味を知るため、焼きいも会と野菜餅づくりを企画しました。焼きいもを調理する際に使用した燃料の古竹とピザ窯は、学内の2つの団体から提供していただきました。共に調理したものを食べることは、日頃の畑作業よりも深い交流につながったと考えています。

秋学期には交換留学生を受け入れ、地域の方との畑作業や先述のイベントなどの活動を行いました。食や農は国籍・年齢に関係なく楽しむことができ、地域活性化の手段として相応しいことを再確認しました。

今年度の活動では、コロナ禍で希薄化した地域との交流を取り戻すだけでなく、学内で新たなつながりを築くことができました。来年度は我々の野菜を使うのに加え、食・農に関する企画から理念の「人と人をつなぐ」きっかけを生み出していきます。